

日本モーツァルト愛好会第525回例会に寄せられたご感想

日時：2023年7月24日（月）19時開演

会場：東京文化会館小ホール

出演：久元祐子

【愛好会会員】

○大自然の賜物である有機物で構成された楽器（フォルテピアノ）と感性豊かな人間の創造力との

コラボレーションが素晴らしく、響きにはとても人間的な温もりを感じました。樹の霊と人間の

魂のコラボレーション、正に梵我一如の世界を感じました。

人間の内面を、心を、そして繊細な気持ちを表現する音楽にとって最も相応しい楽器がフォルテ

ピアノではないでしょうか。「音楽表現の源泉」に存在する楽器かも知れません。

17世紀から18世紀にかけて制作されたストラディバリウスがヴァイオリンによる音楽表現

の極致であるのと同じだと思います。久元さんの演奏をお聴きして自然にモーツァルトの世界に

誘い込まれたような気分でした。

○第1曲目シュタインによる二長調 K284 がなぜあれほど感動的だったのか考えてみる。モーツァ

ルト最大の魅力の一つ、えもいわれぬ疾走感の快感か？アンコールのジュノーム第3楽章でそ

の意を強くする。ヴァルターによるロンド、ソナタ K333、K545、コンツェルト K466、そして

アンコールのジュノーム第2楽章どれも絶品🎵既視感ならぬ既聴感を覚える落ち着いた奏法も

この作曲家の最もチャーミングな演奏のひとつではあるまいか?!作曲家や楽器への深い洞察と

知性溢れる久元祐子さま自らの解説も素敵!!

○久元さんの演奏が素晴らしく、ふらふらと会場を出て来てしまいました。今日の音色は何とも優しい響きで、それでいて宝石がこぼれ落ちるかのような華やかさがあり、至福の時間でした。また明日から頑張れそうです。

○2台のフォルテピアノの弾き比べ（聴衆にとって聴き比べ？）で、前半の《シュタイン》と後半の《ヴァルター》の間に休憩があり、記憶が定着しない小生には後半終了後に少々戸惑いがありました。そこはさすが久元先生、アンコールとして先日のハイドンフィルとの共演時に演奏された「ジュナミ」の第2楽章と第3楽章を続けてそれぞれのピアノで演奏され、音色の違いを明確に理解させていただきました。先生の言葉を拝借すると、シュタインは澁刺とした表現が得意、ヴァルターはしっとりとした音色と深いバスの響きであると。そして、晩年のモーツァルトの素晴らしい作品群はヴァルターがあっぴこそ生まれたのであると。先生の卓越したテクニックとも相まって、会場内は正に1785年頃のモーツァルト・ワールドにタイムスリップ！終演後は長い列を作った方々に一人一人丁寧に対応され、一番最後に小生が厚かましくも25年ほど前に父が先生の講座を受講した際に精読した先生の著作（これは名著ですよ！）に丁寧にサインまで下さり、感謝感激。先生のモーツァルト愛がこもったこの本を一生宝物にすると思いつつ、文化会館をあとにしたのであります。久元先生とスタッフの方々、そして日本モーツァルト愛好会の役員の方々もお疲れさまでした。

○久元さんからのご提案があった、「2台のフォルテピアノの弾き比べとトーク」と言う今回の例会は、まさにモーツァルト愛好会が目指す、「愛好会ならでは」の企画の実現となり、モーツァルト愛好会会員のみならず、臨時会員として参加いただいた多くの聴衆の皆さんにも、評価され

たことは、会場の熱気や終演後の久元さんとお客様方とのお挨拶の様子からも、よく伝わって来ました。演奏とトークと言う二刀流を、予定された時間構成の中で、演奏のすばらしさはもとより、簡潔かつ分かりやすいトーク、そこには、朝日カルチャーでの講座などではあまりお聞き出来ないユーモアがいくつも加味されて、一層楽しいものとなりました。

○前半のシュタイン・モデルのフォルテピアノでの K.284 の第 3 楽章、K.265、K.331 の全楽章（第 3 楽章は新発見の自筆譜による演奏）の演奏も後半のワルター・モデルのフォルテピアノでの K.551 ロンド、K.333 の第 3 楽章、K.466 の第 2 楽章、K.545 全楽章の演奏も、すべて素晴らしく感動いたしました。さらに、アンコールでは K.237 の第 2 楽章をワルター・モデルで、第 3 楽章をシュタイン・モデルで演奏して下さいました。これも大変素晴らしく両者のフォルテピアノの音色の違いが鮮明に伝わりました。夢のようなひと時でした。すべてが素晴らしかったです。小生が今まで聴いたフォルテピアノのモーツァルトの演奏の中で最高に感激いたしました。

K.331 の第 3 楽章の新発見の自筆譜に基づく演奏はとても新鮮でしたし、K.545 は改めて素晴らしい作品だと再認識致しました。これまでフォルテピアノと現代のピアノではモーツァルトのピアノ曲の演奏に大きな隔たり（音色の違い、強弱、ピアノッシモの響き、低音の音等）を感じていたのですが、それが見事に消え去った感があります。そしてこれこそ 18 世紀後半の時代に生きたモーツァルトの姿なのではと思いました。久元先生に本当に心から感謝申し上げます。

○久元様ご自身所有の本物のシュタインとヴァルターをご本人の演奏で、しかも東京文化会館で聴けるなんて夢のようだと思います。行けて良かったです。弾き比べをアンコールで下さってはっきり音の違いが分かりました。久元さんの演奏会は初めてだったのですがとてもユーモ

アあり、へーっそうだったのかーとモーツァルトがまるで生きているような親近感を覚えながら拝聴できました。女声の歌い手がお好きで浮気相手もまたしかりのマクラ（レクチャー）があつてのシュタインはコロラトゥーラソプラノ、ヴァルターはリリコ♪確かにそうでした。一部導入の時は、シュタインのチェンバロにはない音の良さを父親に褒め捲る手紙で、さりげなくオネダリ(*^^)v お父さんは「高いんだろー」のくだり。でもこれが功を奏しその後大活躍する息子は自力でヴァルターを購入！このピアノフォルテ（フォルテピアノ）で数々作曲してくれ後世に宝物が残ったのはミューズの計らいとお話されてからヴァルターで演奏された豊かなベースと柔らかな音色、強弱、間。ホントに凄かったです。

トルコ行進曲自筆譜での演奏。ワインと同じ出来た年により、また作った時期に寄って音色の違う手作りの楽器。馬車が普通に走りおとな3~4人で運搬しあちらこちらで音楽を届けた時代。5オクターブ以内ですべての曲を作ったモーツァルト。ダンパーを膝で上げる短足台。

国立大学卒業演奏で500人は聞いてこられて久元教授。自由曲でモーツァルト選んだ学生たった一人。ピアノ科の学生は化粧で胡麻化することができない間違えたらすぐバレるから敬遠するが声楽の学生はモーツァルト大好き！などなど、演奏と楽器と作曲者の魅力を倍倍化させるエピソードを上品なユーモアで聴かせていただけて幸せでした。終演後も2台の楽器を前にして話の輪が咲いていました(*^^)v（その中に日本スペインピアノ音楽学会でお世話になっている方をマスク越しですが発見しご挨拶もできました）とても贅沢な時間を過ごさせていただきました。心より感謝いたします。モーツァルト初心者ですが今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。（下山静香さん後援会会員の方で、今回の演奏会が契機となって愛好会に入会されました）

○オンライン懇親会から例会開催はいい流れでしたね。久元さんの演奏に込める思いがよく伝わり、演奏が素晴らしいことは言うまでもありませんが、楽曲や時代背景についても深く理解することができました。私は舞台に向かって左側、入口近くの席でしたが、ピアニストの指がよく見えて、打鍵の浅さの意味がよくわかりました。（主に右手薬指と小指を見えました）また、トークにおいては、一般の方ではなかなか知りえないことをわかりやすくかみ砕いてお話しされる姿が印象的でした。私はCD書籍の販売を担当していましたが、開演前→休憩中→終演後と売り上げが伸びていくさまが今回の例会公演に対するお客さまの評価ではなかったと感じております。フォルテピアノ演奏が収録された「優雅なるモーツァルト」が完売で数名の方にお断りしたことが残念です。

○久元祐子さんのご協力と愛好会コラボによる企画、7月例会コンサート「久元祐子の奏でる典雅なモーツァルト～2台のフォルテピアノの弾き比べ～」は盛況裡に終わったこと、誠に大慶に存じます。愛好会立案企画による例会のベルエポックになったのではないのでしょうか。フォルテピアノ；シュタイン、ヴァルターの比較、久元さんの演奏とお話に身を乗り出して聞きこんでしまいました。全体に久元さんの立ち居振る舞いによりさわやかで優雅品格のあるステージであったと思います。右手の速いパッセージはモーツァルトがそう弾いたであろう軽やかな息吹が伝わってきて、空を舞うような心地よさ、さすがフォルテピアノはよかったですね。2台のフォルテピアノ特性のお話も分かりやすく、特に交差弦のがないための透明性もなんとなくわかったような気がします。（バレンボイムが昨年来日したとき、クリス・マーネがスタインウェイに制作させたバレンボイム用平行弦ピアノでベートーヴェンのソナタを弾いたことを思い出しました。）個人的印象であえて言えば、シュタインはチェンバロに近く、ヴァルターは現代ピアノに通じ

ると感じられヴァルターの深さと重みを感じられます。モーツァルトの特に短調曲にはふさわしいように思いましたし、モーツァルトがお気に入りになるのは想像に難くないと感じました。一方小生の好きな初期6曲のピアノソナタ(K279~284)はシュタインで聞きたくもなりました。オンライン懇談会でお聞きした2台のフォルテピアノについてのお話は役立ちました。

○会員のIさんに「前方の席が空いているわよ」と促され、何と2列目下手から久元先生の演奏を拝聴する幸運に恵まれました。18世紀、モーツァルトの時代の二つの楽器、シュタインとワルターで奏せられる夏の夜のコンサート、楽器の成り立ち、モダンピアノとの違いなど解説も分かり易く、何よりも久元裕子さんの典雅な雰囲気と巧まざるユーモアも相俟って、観客席から時折笑い声も漏れ聞こえてきて和やかで楽しい雰囲気でのコンサートでした。先生の演奏を通じ、モーツァルト自身が演奏した響きを実際に体験出来たのは、誠に貴重であり、久元裕子先生のファンとモーツァルトを愛する仲間達だけの親密な空間を共有出来て本当に幸せでした。上野文化会館に、微笑みを湛えたモーツァルトが降臨し見守ってくれていたのかもしれないね。

P.S. 20年前から解説付きの演奏会を拝聴してきましたが、お世辞抜きで外見もお変わりなく、魅力的です。

○愛好会では初めての文化会館小ホールでの演奏会は成功しましたね。日本モーツァルト愛好会にとって顔とも言うべき存在のピアニスト久元祐子さんの2台のフォルテピアノを使ったコンサートは実に見事で感動しました。愛好会の歴史的コンサートの一つとして聴いた人の心に強く刻まれていくでしょう。当時のモーツァルトが弾き、作曲に使用したフォルテピアノで、円熟した久元さんの手によって再現された音楽は、作品のオリジナルの味が凄く出ていて深く感動しました。そして通常より大きなホールに負けない強く豊かな音に感じました。ユーモアを

交えた一貫した流れのトークに実演が加わり、二つのフォルテピアノの特徴や違いもとてもよく理解できました。隣に座ったツウでない人の心もすっかり虜にしたようです。

○～この楽器にしてこの曲あり～

モーツァルトの音楽のよさがストレートに伝わってくる素晴らしい体験をありがとうございました。近年、フォルテピアノを聴く機会が増えてきましたが、聴きなれたモダンピアノとの違いがまず気になって、楽しむうえでは壁になるという体験もときどきありました。今回の演奏では、楽器の違いが「魅力」そのものであり、「この楽器にしてこの曲あり」との感を深くしました。現代ピアノが「金属」の音だとすると、フォルテピアノは「木の音」がします。こうした楽器の特徴と表現力を全開させたのがモーツァルトの音楽だと、演奏から実感しました。

帰宅後、フォルテピアノとモダンピアノのベーゼンドルファーで同じK.331と333を演奏された「優雅なるモーツァルト」を聴いてハッとしました。現代のベーゼンの音がまるでヴァルターのような音に聴こえたからです。フォルテピアノの持っているものを現代ピアノに置き換えようとされているのだなと思いましたが、この感じ方はどうでしょうか？

演奏の合間の解説も、音楽的なりズムや抑揚が感じられ、「言葉による演奏」のようで、ピアノ演奏と一体になっていました。改めて、素晴らしい体験をさせていただいたことにお礼を申し上げます。

○初めて、シュタインとヴァルターの違いを理解いたしました。シュタインは軽やかで、高音が良く響きます。ヴァルターの方は低音が良く響き、しっとりとした音色でした。デュルニッツのような軽快な曲は、確かにシュタインにぴったりでした。ヴァルターを使用するようになっ

たことで、モーツァルトの曲に深みが増して行ったのでしょうか。ユーモアの溢れたトークを楽しみ、また素晴らしい演奏に聞き惚れ、納得いたしました。ありがとうございました。

○旋律が美しく淀みなく流れ、それでいて一音一音に表情があり感動しました。鍵盤のストロークがモダンピアノに比べて小さいなどの説明があり納得しました。トークの流れも素晴らしく長く教育者の立場としても活躍されてきた結果の結晶でしょう。これも納得です。

○以前フォルテピアノによるモーツァルトの協奏曲を聴いたことがあったが、音量が不足して満足できなかった。今回は十分な音量で満足した。小ホールだったせいだろうか。

・最初のピアノ・ソナタ K.284 の出だしを聞いたとき、やっぱりフォルテピアノの音だなと感じたが、いつの間にか私の耳ではフォルテピアノとモダンピアノのモダンピアノの区別が消失し、これが時代を超えた世界の標準だという感じになってしまった。それを演奏する久元さんも18世紀のピアノ弾きになりきったのだと感じた。同時代の女流ピアニスト、パラディースのピアノ協奏曲第18番の演奏がどんなものだったか、想像をかき立てられた。

私はモーツァルトのリズムの素晴らしさを再考していたので、リズムの躍動に「耳」を見張った。

左手と右手がリズムを刻みながら、時に交差して会話を重ねる。ダイナミック、アクセント、付点音符とスラー、ダンパーによる響きの調節、テンポの切り替えなど、チェンバロでは果たせなかったことが表現できる喜び。歴史と符節が合っているかどうか分からないが、モーツァルトはミュンヘンでピアノという新しい強力な楽器に接して、それまで表現できなかった響きを一挙に表現し、その喜びに浸っているように感じられた。

・プログラムは変奏曲ハ長調 K.265、ソナタ・イ長調 K.331、ロンド・イ短調 K.511、ソナタ・変

ロ長調 K.333、ピアノ協奏曲第 20 番ニ短調 K.466 と続く。何と盛りだくさん、サービス精神の横溢か。久元さんの心遣いだけではない、モーツァルト自身のサービス精神の発露。モダンピアノによって表現力が増して来たといわれるが、モーツァルトはフォルテピアノで全てを表現し尽くしている。久元さんの解説にもあったが、K.333 にしろ、K.466 にしろ、歌があり、踊りがあり、ドラマがあり、協奏曲がある、すべてが詰まった音楽の小宇宙である。

- ・アンコールのピアノ協奏曲第 9 番 K.271 の第 2、第 3 楽章の 2 台のピアノによる 弾き比べも素晴らしかった。情感あふれる第 2 楽章はヴァルターのピアノで弾かれた。感情表現に深みを与えるにふさわしい楽器だった。第 3 楽章はシュタインのピアノで弾かれた。思いもよらずシュタインのピアノはすべてを表現しきっていた。発展途上のピアノと思っていたが、完成の域に達していたことを知らされた。私は K.271 をリズムの曲だと思っているので、ダイナミックな演奏にしばれた。解説にもあったようにベートーヴェンはピアノの発展とともに表現の幅を広げていったが、モーツァルトはフォルテピアノですべてをやり遂げ、モーツァルトとしてはその後のピアノの発展に何も付け足す必要はなかったのだと感じさせる演奏会であった。

- チェンバロの響きを想起させるややくぐもった響きながら格調の高さを感じるシュタインと、明るくシャープで粒立ちが良く幅広く多彩な表現力のあるヴァルターを同じ舞台上で同時に聴き比べることによって、楽器の進化と相俟ってモーツァルトの内面の成熟が実感されるコンサートでした。優れた演奏家であり作曲家であったモーツァルト、優れた演奏家でありトークの名手である久元祐子さん。二刀流が二刀流を捌くという何とも贅沢なコンサートでした。ヴァルターの響きにはモダンピアノの登場を予感させるものを感じました。会場でお会いしたモーツァルト協会理事の方も「素晴らしい企画と演奏で魅了されました」と仰って下さいました。

【一般のご来場者】

○フォルテピアノは、モーツァルトの時代に急速に発展したと聞くものの、実際のところはどうだったんだろうとよく分からなかったので、今日の2台の違いはとても興味深く聴かせていただきました。ヴァルターはびっくりしました。偶数倍音が多いような奥行きのある音で、モダンタイプ並みの表現の自由さがあるようにも感じました。サントリーのブルーローズにあるエラールより何十年も前のモデルのはずなのにむしろ近代的な音色にも感じられ、モーツァルトが気に入ったのも納得です。シュタインはどちらかというと、フォルテピアノと聞いてイメージする音色に近かったように感じましたが、小さな音でも痩せないとても品位が高い音色だと感じました。もちろん演奏の確かさがあってこそではありますが、、、。

レコード、CDでピリオド楽器としてのフォルテピアノは時々聞きますし、ハイドンのピアノソナタはモダン版とフォルテピアノ版で集めたりしてありますが、どうもフォルテピアノ版はしっくりしないことが多いです。チェンバロは大好きですが。しかし、今日でフォルテピアノに対する認識をまた新たにしました。貴重な体験でした。一方で、普段、私にとってモーツァルトは、オペラでもなくシンフォニーでもなく専らピアノソナタです。それも初期から中期にかけて。K545より本日オープニングのK284の方が馴染みがあるくらいです(モーツァルトでもっとも好むのはソナタ1番のK279だったりします)。ピアノ協奏曲も、モーツァルトの場合オケはなんとなく邪魔だな、と感じるようになってしまい、だんだんと聴かなくなってしまう。しかし、本日のコンチェルト20番のピアノソロ版は、これいいなと新たな発見でした。アンコールの9番も。コンチェルトも全曲ピアノソロ版は無いかな、と思ったりもしました。そんなこんなで、今日は十分に楽しませていただきました。(広瀬友人で、学生時代にオーボエを演奏された)

○生徒がお母様と聴きに伺いました。2台の楽器の音がかなり違って、勉強になったと申しあげました。沢山の方が聴きにいらしたようで、素晴らしいですね！（愛好会例会ご出演経験のあるピアニスト）

○昨晚の例会は 正に愛好会にふさわしい企画でご案内 推薦くださり、有難うございました。

久元さんの演奏とお話によって、私の生涯に残る一夜となりました。2台の聴き比べは、お話と演奏によって ピアノとしての構造や、演奏法の違いもあり、モーツァルト自身がこの変遷の時代を生きたとすることで、しっかり理解できました。ピアノに関するお話では5オクターブしか出なかったり、膝で強弱を付けたり、鍵盤の白黒が逆だったり、そうなんですねとビックリしました。その他のお話で 失われた自筆楽譜（未発見）とか、モーツァルトの死生観、久元さんの教え子の500人中一人しか卒業演奏に選ばなかったというソナタ K.545 が個人的には一番感動しました。

久元さんが 当時の楽器を身をもって演奏することで、我々にその歴史を伝え、モーツァルトに思いをはせ、そして天国のモーツァルトに届ける演奏で、その場に私も居合わせることができて幸せでした。ありがとうございました。（朝吹友人）

○シュタインとヴァルターというピアノの音色の違いがあり、モーツァルトの作品の性格の違いをもたらしめている事が体感出来る素晴らしい企画でした。（下山静香さん後援会事務局）

○フォルテピアノをナマで聴くのは初体験。チェンバロとモダンピアノの架け橋のような地味ながら精妙な音色と久元さんの素晴らしい演奏を家内共々楽しみながら暫しモーツァルト時代のサ

ロンに思いを馳せておりました。聴き比べは正直私の耳にははっきりとは分からなかったのですが、久元さんが話されていたコロラトゥーラソプラノとリリコソプラノの比喻は「あっ！そうかも」と感じる部分がありました。でもこれも演奏した曲種の違いが効いてるのかも知れません。本当は二人の奏者が同じパッセージを交互に奏でて頂ければ、とも思いました。演奏と共に久元さんのトークも大変分かりやすく時にユーモアも交え素晴らしかったです。鍵盤の色の話は私も初めて知りました。“立て板に水”の能弁とは異なり訥々としながらもとても自然体で聴き手の心にすーっと入ってきます。「お人柄が偲ばれる」と家内も大変親近感を持ったようでした。東京文化会館小ホールはウン十年振りくらいに久し振りでしたがいいホールですね！（朝吹友人）

○小生にとり大変有意義な時間を過ごすことができました。久元先生の演奏を初めて拝聴できたと、また、2つのフォルテピアノの音を聴けたことも大きな収穫でした。あくまで私自身の感想ですが、ピアノ・ソナタ ハ長調 K.545、中でも第1楽章が大変すばらしい演奏だったと感じました。それにしましても、久元先生があれほどお話の上手な方だとは存じ上げませんでした。驚愕しました。演奏よりもおしゃべりが長い感じはするものの、なにしろ話が面白いので私自身はとても楽しめました。（音楽マネジメント会社代表）

○フォルテピアノ二台による久元さんのモーツァルトは大変素晴らしく、又大いに勉強をさせていただきました。私の友人と、そのご家族もコンサートを聴かせていただきましたが、素晴らしい例会に感激しておりました。（愛好会例会ご出演経験のあるピアニスト）

○とても素敵なおコンサートでした。リハーサルを舞台上におりましたので、2台の楽器の特性の違い

いがよくわかり、モーツァルトの作曲の思いに直に触れたように感じております。トークの中ではモーツァルト演奏の「すっぴん」のような難しさを話されておりました。私もかつて学生オーケストラにおりまして、「モーツァルトの交響曲をやりたい」と先輩に話したところ、丸裸になる難しさを説かれて、実現しませんでした。ハイドンからベートーヴェン、ストラヴィンスキー、メシアンまで演奏するオーケストラでしたが…。そんなことを思い出しておりました。

(例会の記録写真を撮影された写真家)

○モーツァルトの愛した、シュタインとヴァルター 久元祐子さんが二種のフォルテピアノを弾き比べました。

1777年、21歳のモーツァルトは、マンハイムとパリを主要目的地とする求職旅行の途上、アウグスブルクで、名作家アンドレアス・シュタインの工房で彼の手になるフォルテピアノを試奏させてもらい、そのムラのない響きに感嘆して、すっかりフォルテピアノの虜となりザルツブルクの父レオポルト宛の手紙に、シュタインの楽器をほめちぎっています。

しかしこのときは、自身が職を求める切実な旅の道中でしたから、購入など、思いもよりません。でも結局、この長期旅行は彼に就職口ももたらさないどころか、パリで、同行していた最愛の母を喪う羽目となります。

4年後の1781年5月、いよいよ、主君コロレド大司教と決別した彼は、ウィーンで独立独歩の音楽家生活を開始し、ここで、アントン・ヴァルター作のフォルテピアノと出会い、みずからの稼いで、ヴァルターの名器を手に入れて愛奏しました。



この2種のフォルテピアノをモデルとした、現代の名工による2種楽器を弾き比べる、という試みを、フォルテピアノの名手、久元祐子さんが、今宵（7月24日）、東京文化会館で開催された、日本モーツァルト愛好会第525回例会に於いて、実現してくださいました。

前半の、ズッカーマン製作のシュタイン・モデ(写真手前)では、ソナタ・ニ長調 K.205b、第一楽章、『ああ、お母さん、あなたに申しませう』変奏曲、ソナタ・イ長調 K.331 全楽章が演奏されました。響きは、ややドライですが、その一方軽やかさもあって、これらの曲目にぴったりでした。後半は、ヴァルター・モデルのペトロゼッリ(写真奥の楽譜が乗っている楽器)です。ロンド・イ長調、ソナタ・変ロ長調 K.333 のフィナーレ、そして、ピアノ協奏曲第20番ニ短調の第2楽章、ソナタ・ハ長調 K.545 の全楽章が、潤いのある響きで紡がれ、その豊かな表情と余韻に感嘆いたしました。

シュタイン・モデルも音の分離の良さ、軽やかさに優れて聴きやすく、ヴァルターはさらに、多彩な表現力があり、なるほど、モーツァルトは常により深く自己実現できる楽器を求めてやま

なかったのだ、とおおいに感嘆いたしました。それもこれも、久元さんの弾き比べというアイデアと名演のおかげでした。ありがとうございました。2023年7月24日記

(音楽評論家萩谷由喜子さんのブログ)

○開場中や終演後に2台のフォルテピアノを多くのお客様が撮影されている姿からも、多くのお客様に楽しんで頂ける内容の演奏会だったのではないかと感じておりました。(東京文化会館小ホールご担当者)

○モーツァルトをこよなく愛する会員の皆様、お客様に温かく迎えていただき、久元もとてもリラックスして演奏できたのではと思います。CD販売ではご関係の皆様には大変お手数をおかけいたしました。思いのほかお手にとってくださるお客様が多く、特にフォルテピアノでの録音は数が少ないので、販売できる機会をいただきましたこと、御礼を申し上げます。

(久元さんのマネジメント会社のご担当者)

(2023年7月29日 文責：朝吹英和)